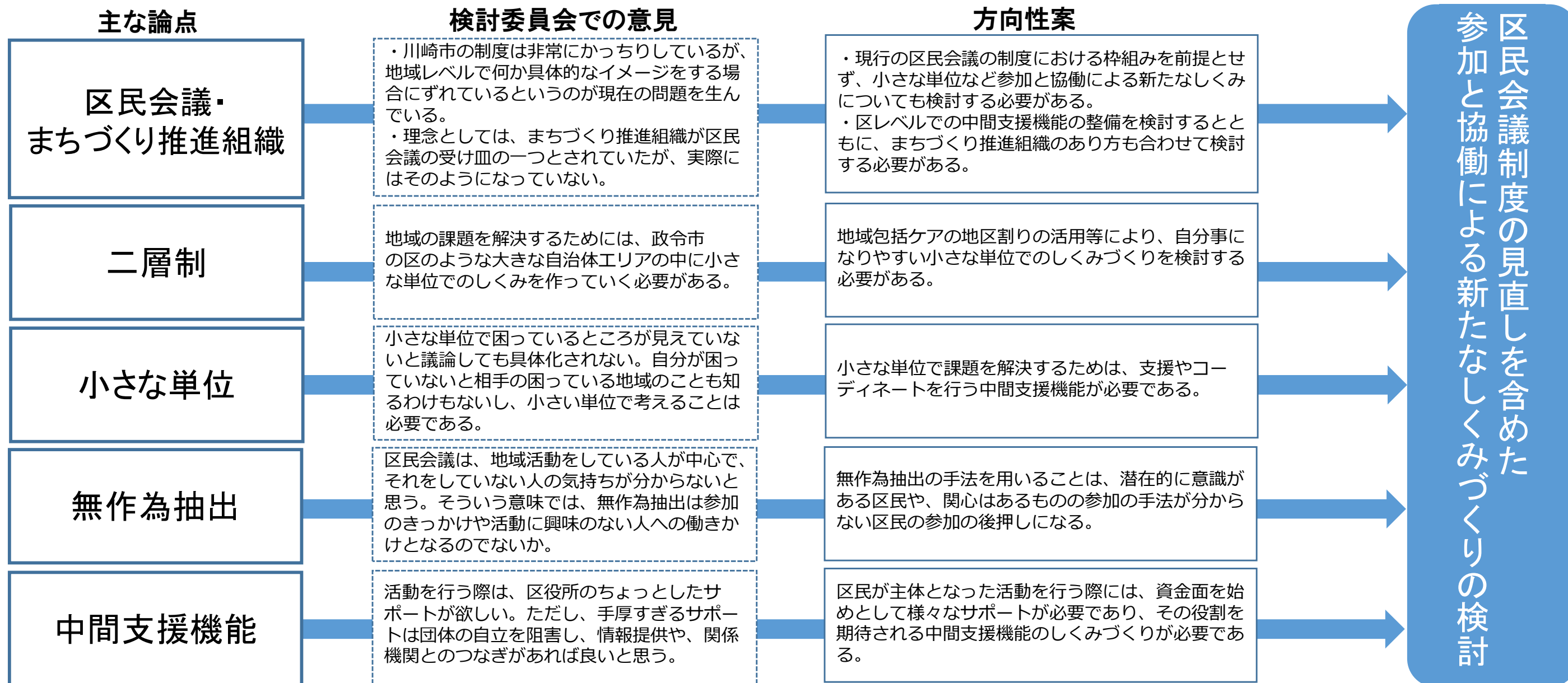
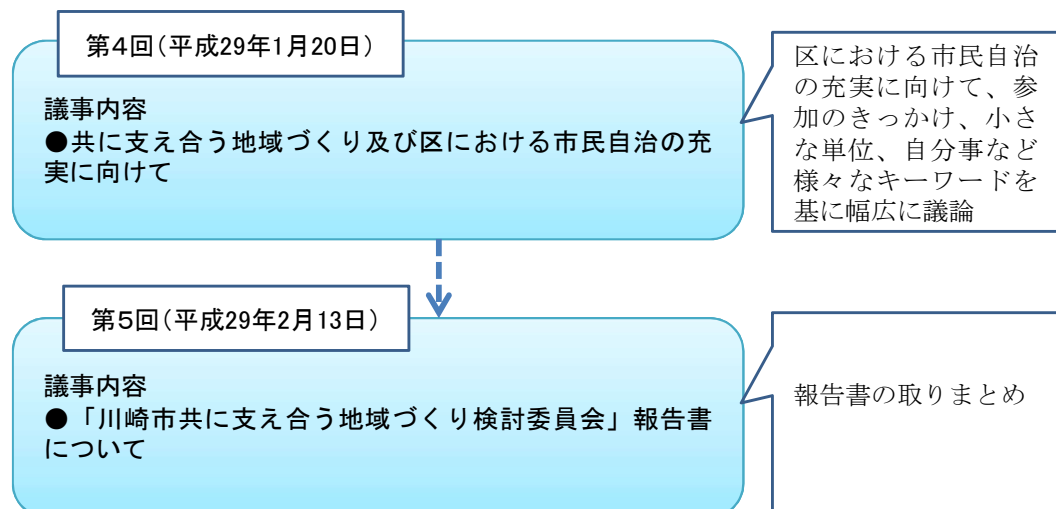


1 市民自治の充実に向けた幅広い検討について

第3回検討委員会においては、「(仮)新たな区民会議」のあり方の方向性について、項目別に検討を行い、様々な意見が出ました。その中で、共に支え合う地域づくり及び区における市民自治の充実に向けては、現行の区民会議制度の枠組みの中では成し得ない部分もあり、第4回検討委員会では、改めて幅広く議論を行うこととします。



2 今後の検討委員会スケジュール



3 報告書について

報告書の構成については、以下のように想定されます。

- 第1章 川崎市共に支え合う地域づくり検討委員会について
- 第2章 共に支え合う地域づくり及び区における市民自治の充実に向けて
 - 【提言1】 区民会議、まちづくり推進組織等の既存の組織の役割や方向性について
 - 【提言2】 参加と協働による地域課題の解決の新たなしくみについて
 - 【提言3】 市民自治の充実について
- 資料編
 - ・川崎市共に支え合う地域づくり検討委員会資料
 - ・川崎市自治基本条例
 - ・川崎市区民会議条例

【参考】主な検討事項についての意見（第1回～3回検討委員会）

項目	委員の主な意見
二層制について	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の課題を解決するためには、政令市の区のような大きな自治体エリアの中に小さな単位での仕組みを作っていく必要がある。 ・川崎市の制度は非常にかっちりしているが、地域レベルで何か具体的なイメージをする場合にずれているというのが現在の問題を生んでいるので、ここの部分をどう制度設計していくかがポイントである。
小さな単位・自分事について	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな単位で考えるときに、小さな単位で困っているところが見えていないと幾ら議論しても具体化されない。自分が困っていないと相手の困っている地域のことも知るわけもないし、考えることもできないので、小さい単位で考えていくことはとても必要である。 ・同じ区内でも地域によって課題が大きく変わってくるので、小さな単位というのは、これまで区民会議に参加しながら必要なのではないかと考えていた。 ・小さな単位の課題を吸上げていくことは、何か違う仕組みが必要であり、それは区民会議ではないと思う。 ・小さな単位というのは地域包括ケアの取組とも非常に関連していると思う。 ・区民会議と小さな単位、自分事というのは結び付きづらい。ただ、住民自治を推進するであるとかコミュニティのあり方を考えるといったときには必要なキーワードであると思う。
参加・無作為抽出について	<ul style="list-style-type: none"> ・現状の区民会議は、地域活動をしている人が中心で、それをしていない人の気持ちが分からないと思う。そういう意味では、無作為抽出は参加のきっかけや活動に興味のない人への働きかけとなるのではないかと。 ・無作為抽出でイベント的に開催し、センスのいい人を見つける人材発掘の場としてもよいのではないかと。 ・これまでの団体推薦プラス公募委員という形ではなかなか得られないような方々の意見が得られるというのは、全国的な事例からしてもそうであろうと聞いている。
実践・中間支援機能	<ul style="list-style-type: none"> ・実践を行う際は、区役所のちょっとしたサポートが欲しい。ただし、手厚すぎるサポートは団体の自立を阻害し、情報提供や、関係機関とのつながりがあれば良いと思う。 ・中間支援機能を持つまちづくり推進組織はあるが、区毎に異なる活動をしている状態なので、市民にわかりやすいようある程度まとめていく必要はあると思う。 ・区の課題は大きすぎて気軽に取り組むわけにいかない。区単位で活動してきたまちづくり推進組織の中間支援機能と地べたの市民活動がどのように連携したら川崎市が良くなるのか議論する必要がある。 ・上越市や宮崎市の事例を見てみると、調査審議を行う附属機関があり、それを実践する仕組みが考えられていて、予算も担保されている。特に宮崎市の場合は、その部分も条例化されている。その点が川崎市における区民会議でも一つの論点になっている。
地域包括ケアについて	<ul style="list-style-type: none"> ・実践ということを考えると、課題を抱えている地域は区全域ではない。小さな地域ということは地域包括ケアの取組とも非常に関連しているように思う。 ・地域包括ケアの日常的な対人的なサービスの部分は専門性が必要であると思われ、そこに区民会議が入り込んでいくことは難しいと思う。 ・地域包括ケアは、地域福祉の世界で言うときは、割と行政サービスだとか介護保険サービス以外のインフォーマルなサポートを持っていない人にも届くようにするという「みまもり」というときに「地域包括ケア」と言ったりもする。この「地域包括ケア」はもう少し軽く、インフォーマルだからこそだし、またそれが求められているというところのイメージで構築した方が合っているのではないかと感じている。
区民会議について	<ul style="list-style-type: none"> ・条例で位置付けられているので意見を言うのにとっても敷居が高く、楽しいことを思いついても、こんな場で言っているのか迷うことがあった。 ・区民会議はこういうものだ、こういう条例に基づいてやっているんだ、だから、こうしなくてはいけないというのが議論をしても感覚的に埋め込まれていると思う。 ・区民会議は調査審議までだが、その後の「担い手」が不透明なまま終わってしまう。課題解決のために担い手を想定しているが、調査審議が終わった時点では見えなくなってしまっている。 ・区民会議は様々な団体の参加があり、うまくいけばとても有意義な会議である。ただ、団体から参加される委員は団体の一員として参加しているという意識が少ないように感じた。会議で解決すべき課題を見つけても誰がやるのかという段階で尻込みがあった。 ・区民会議で何かやるということを要求すると、負担感しかないと思う。区民会議に入ったら自動的に何かしなければならぬということはない、と初めに伝えたほうが安心して積極的に発言するし、いろいろなことができる。 ・三鷹市の住民協議会や新宿区の地区協議会、上越市と宮崎市の地域自治区制度など、どの自治体も実践のために工夫しているいろいろなことをやっているのだから、川崎市の区民会議にも参考になると思う。
まちづくり推進組織について	<ul style="list-style-type: none"> ・理念としては、まちづくり推進組織が区民会議の受け皿とされているが、実際はそうになっていない。 ・まちづくり推進組織はハード系も含めてイベント的なものを行っているが、各区毎の多様性もあり、組織がない区もある。役割として、イベントを実施していくのか、あるいは中間支援に特化していくのか、まだ見えてこないが、今の組織をどう変えていくと良いのかというところを検討していく必要がある。 ・中間支援機能を持つまちづくり推進組織はあるが、区毎に異なる活動をしている状態なので、市民にわかりやすいようある程度まとめていく必要はあると思う。 ・区の課題は大きすぎて気軽に取り組むわけにいかない。区単位で活動してきたまちづくり推進組織の中間支援機能と地べたの市民活動がどのように連携したら川崎市が良くなるのか議論する必要がある。